

川と下町

ジャーナリスト 浦田 憲治

「自分はこうして、こうもあの川を愛するの
か。あの何方かと云えば、泥濁りのした大川の
生暖かい水に、限らない床しさを感じるのか。
自分ながらも、少しく、其説明に苦しみずには
いられない」 「此大川の水に撫愛される沿岸の
町々は、皆自分にとって、忘れ難い、なつかし
い町である」

芥川龍之介は随筆『大川の水』で、自分が生
れ育った隅田川のほとりや駒形、蔵前、柳橋な
どの下町への愛着を熱っぽく語っている。わた
しもこれまで育ってきた川べりや下町の光景を
こよなく愛している。

令和七年二月、わたしはさいたま市大宮区か
ら東京の荒川区西尾久へと転居した。すでに娘
の家があったこと、尾久が隅田川沿いで、住み
やすいだろうと思ったからだ。

わたしは旧浦和市（現さいたま市）の生れだ
が、幼い時から中学を卒業するまで、川口市で
育った。毎日のように近くの荒川を見てきた。
ポンポン蒸気船、貨物船、ボートが行きかう風
景を。川口と赤羽を県境をはさんで結ぶ新荒川
大橋を頻繁に往来したバスや自動車を。夏には
土手の上で蝶を追いかけて、草むらでバッタやイ
ナゴを捕まえた。冬の晴れた日には、遠くに見
える真つ白に化粧した富士山を眺め、北からや
ってきたマガモやオナガガモの群れを見た。

川口は鋳物工場がひしめく町だった。溶鉱炉

の回りで汗を流して働く職人たち。一六〇〇度
の高熱で、真つ赤にコークスが燃えさかるキュ
ーポラ。ゴーグル、手袋、防護服を身につけた
職人が、ドロドロに溶けた鉄やアルミニウムの
溶液を、バケツのような容器に移し替え、砂や
金属の鋳型に流し込む。ガスが噴き出し、火花
が飛び散り、猛烈に熱い。子供だったわたしは、
胸をワクワクさせながらそれを見ていた。

夜になると町の銭湯は職人であふれ、歓声が
響いた。多くの職人は木造のアパートに住んで
いた。わたしはアパートの空地で、職人の子供
たちとベーゴマ、メンコ、ビー玉、缶けりをし
て遊んだ。

尾久の町は、川口とよく似ているように感じ
た。阿部定事件で知られ、大正から昭和にかけ
て、温泉のわく花街としてにぎわったが、現在
は町工場、個人商店、住宅、寺や神社が建ち並
ぶ典型的な下町となっている。鋳物工場、金属
機械工場、印刷工場などがあり、職人の町でも
ある。隅田川が荒川（放水路）と、赤羽にある
岩淵水門で分かれ、青黒い水をたたえながら、
東に向かってゆったりと流れている。東京都内
で唯一残された都電の荒川線が町のほぼ真ん中
を東西に走り、沿線にはバラが植栽されている。
全国でも珍しい区立の遊園地「あらかわ遊園」
があり、高さ一四〇メートルの観覧車に乗ると、
隅田川、スーパー堤防などの水の風景が一望で
きる。都心に近い距離にあるわりには、穏やか
で、閑静で、昭和の面影を多く残している。ど
ことなく、なつかしさ、安らぎ、親しみを感じ

る。

わたしは、転居以来、都電の小台、宮ノ前、熊野前の周辺の商店街の路地をめぐり始めた。和菓子、せんべい、豆腐、そば、うなぎ、とんかつ、おでん、天ぷら、煎茶などの古くからの店が目立つ。あちこちに銭湯があり、とくに日曜日の朝風呂は人気が高い。わたしもほぼ半世紀ぶりに銭湯に入るようになった。喫茶店は、スターバックスのようなチェーン店がなくて、それぞれ個性的で喫茶店をめぐるのも楽しい。さらに毎朝のラジオ体操会に参加したのち、宮前公園、尾久橋、小台橋、あらかわ遊園と、隅田川の川沿いを一時間近くかけて歩くようになった。

先日、大学の同窓会で、尾久に転居したことを話すと、高校時代にボート部にいた友人が笑ってこう語った。「尾久には高校の艇庫があったからよく通ったよ。昭和四十年代初めの隅田川は泥水のように、悪臭がひどかった」。しかし、現在の隅田川は水質がかなり改善され、ほとんど臭わない。

いま、隅田川は、犬を連れて散歩する人、ジョギングをする人たちが遊歩道を行きかい、脇をマガモやユリカモメがすいすいと泳いでいくのどかで平和そのものである。

ふと、芥川の『トロッコ』に似た、少年時代の恐ろしい体験を思い出した。冬のある日、赤羽の町で東映の三本立て時代劇映画を見た帰りの出来事だった。映画館を出ると、陽が落ち、真っ暗だった。ポケットをさぐると、落とした

のか、帰りのバス代がない。仕方なく川口まで歩くことにした。街灯をたよりに暗闇の中をトボトボと歩き、なんとか新荒川大橋までたどり着く。しかし橋は全長八〇〇メートルと恐ろしく長い。しかも徒歩で橋を渡るのはこの時が初めてだった。心細いやら、怖いやら、涙がこぼれ落ちるのを必死でこらえながら、やっとのことで橋を渡り終えることができた。振り返れば、この苦い思い出を含め、川や下町のすべてがなつかしい。